リゾート施設の先駆け

札幌温泉

娯楽場も備え、大勢の浴客でにぎわいながら、わずか六年で営業を終えた幻の温泉「札幌温泉」を紹介します。

札幌温泉が誕生したのは、今からおよそ八十年前のこと。当時の札幌は市制を施行したばかりで、人口はようやく十三万人に達するころでした。現在、閑静な住宅街となっている界川・双子山地区も、農耕地や牧場などのどかな風景が広がっていました。

しかし、大正十一年（一九二二年）になると、界川・双子山地区でも大規模な宅地分譲が始められることとなり、さらには環境整備の一環として温泉施設の建設も計画されたのです。温泉施設の建設を行ったのは、宅地分譲も手掛けた札幌温泉土地株式会社でした。当時は、湯脈を掘り当てる技術が発達していなかったため、同社は定山渓から界川までの約三十キロの道のりにコンクリート製の管を埋め込んで湯を流し、再度沸かす方法を取りました。こうして、十三年（一九二四年）秋に「札幌温泉」が現在の界川一丁目に完成したのです。

この温泉は、コンクリート造り二階建ての洋館風の豪華な施設で、前庭には、噴水やヒグマのおりなども置かれ、浴客の目を楽しませていました。宿泊施設も完備され、一度に五十人も入れる浴槽が二つ用意されていたといいます。また、当時の札幌温泉

洋館風の豪華な札幌温泉
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

までの交通機関は、夏はバス、冬は馬そりでしたが、浴客を増やし、分譲販売を促すため、札幌温泉土地株式会社は、電車事業にも着手し、昭和三年の春には、当時の円山三丁目停留所を起点とし、双子山通り分岐路まで至る単線（約二キロ）の運行を始めました。その後、温泉をはじめ分譲地区への交通は季節を問わず快適なものとなり、札幌温泉は市内各所から家族連れや職場の同僚同士など、多くの市民でにぎわう憩いの場となったのです。

しかし、五年になって、電車の変電所が焼失するという思い掛けない事故が起こりました。この事故を引き金に、電車の運行は廃止され、さらに定山渓からの送湯システムにも支障をきたしてしまいます。このため、浴客は激減してしまい、同年中に札幌温泉はわずか六年間でその栄華に幕を下ろすこととなり、まさに幻の温泉となりました。

（平成十四年一月号・第八十一回）